

## 双ヶ岡一の丘の首長墓

<http://www.kyoto-arc.or.jp>  
(財)京都市埋蔵文化財研究所・京都市考古資料館



北東上空から見た双ヶ岡全景（手前が一の丘）

京都の西郊、花園の地に<sup>きつりつ</sup>屹立する双ヶ岡は、昭和16年(1941)に国の名勝「<sup>ならびがおか</sup>双ヶ岡」に指定されました。北山から南へ少し離れた独立丘陵で、北から一の丘(標高116m)、二の丘(102m)、三の丘(78m)の三つの峰が南北に並んでいます。もとは仁和寺の所有でしたが、昭和53年(1978)に京都市が一部公有化し、環境整備を行なって、昭和61年(1986)より一般に開放されて親しまれています。

この双ヶ岡には、古墳時代後期の6世紀後半から7世紀前半に築かれた24基の古墳があって、「双ヶ岡古墳群」と呼ばれています。一番高い北側の一の丘の頂上に単独で築かれた1号墳以外は直径10mから20mほどの小型の円墳で、一の丘と二の丘の間の谷筋に9基、二の丘の頂上に1基、二の丘の南裾から三の丘に13基が分布しています。環境整備ともなつて昭和55年(1980)、1号墳の発掘調査を行ないました。

1号墳は直径44m・高さ8mの円墳です。埋葬施設として横穴式石室を備えています。その入口は南西、つまり嵯峨野の方向に向けられています。石室の構造は入口から<sup>せんどう</sup>羨道といわれる通路状の部屋を通して、お棺を納める<sup>げんしつ</sup>玄室にいたります。平面形は、羨道が玄室の中央に取り付く<sup>うちり</sup>両袖式という形態の石室です。石室の内法は、全長が15.8m、羨道の長さ9.2m・幅2.3m・高さ2.3m、玄室の長さ6.4m・幅4m・高さ5.2m、1辺



1号墳の玄室から羨道部を見る



双ヶ岡古墳群分布図(1:10000)

が2mを越える巨石を3段から4段積み上げて造られています。同じ太秦地域にある、巨大な石室で有名な<sup>へびづか</sup>蛇塚古墳にも遜色ない大きさの石室です。既に盗掘を受けていて、副葬品のほとんどが失われていましたが、わずかに須恵器・土師器・鉄製品・石棺の破片などと、金環(耳飾り)が見つかりました。

1号墳の墳丘の南東部には明治45年(1912)に建てられた「右大臣贈正二位清原真人夏野公墓」と刻まれた立派な石碑があります。平安時代初期の貴族で、双ヶ岡の南東裾に山荘(後の法金剛院)を構え、右大臣までのぼり詰めた清原夏野延暦元年~承和4年(782~837)の墓と顕彰されたこともあったようです。石室内で平安時代の土器なども見つかり、古墳が造られた時代とは全くあわないのですが、何らかのお祀りがなされていたのかもしれない。

双ヶ岡の南西は<sup>かどの</sup>葛野秦氏の本拠地・太秦です。集落遺跡である村ノ内町遺跡や常盤仲之町遺跡、群集墳である常盤東ノ町古墳群など古墳時代後期の遺跡密集地であり、飛鳥時代には広隆寺(蜂岡寺)が建立されます。1号墳は出土遺物などから6世紀後半に双ヶ岡に最初に造られたもので、周辺の古墳にくらべて墳丘や石室の規模が秀でた立派なもので、首長の墓と考えられます。これらの地域が一望できる双ヶ岡一の丘に築かれていることも、それを裏付けています。太秦を本拠とした秦氏の長の墓と考えて良いでしょう。

(高橋 潔)